

ビデオテープ・レコーダーの調査とその考察

野 沢 卓 式

はじめに

今回、家庭において使用されているビデオテープ・レコーダー（以下 V T R と略す）について若干の調査を行った。その目的は以下の通りである。

1. テレビはそれ自体の特殊なメディア性に大きく支配されている。
2. そのいくつかは環境を整備することによって、ある程度克服することは可能である。しかし、ある時間から始まって、ある時間に終る、という時間の絶対性というもののだけは超えることは出来なかった。
3. テレビの本質論は、特殊なシステムや環境条件と共に、この絶対時間性の中から生まれたと私は考える。
4. ところが、一定した時間の流れを止めたり、逆行したり、とばしたり、あるいは見る側の環境条件をある程度変更できるメカニズムが家庭の中に入ってきた。V T R である。
5. こうした時、テレビの本質論はどのような影響を受けるであろうか。

これが私の問題意識である。

V T R の出現と普及は、テレビの制作者、特に教育番組の制作者に、次のような意識をもたらしつつあることを私は感ずる。

1. テレビの持つ絶対時間性は V T R によってコントロール出来るようになった。
2. そのことは、放送メディアを印刷メディアに近づけたことを意味する。
3. V T R によって印刷メディア的使用が可能であるならば、印刷メディア的テレビ番組——あらかじめビデオテープの停止、反復を予想し、過

大な情報量をつめこんだり、高度で、抽象的な表現を盛り込んだ番組等を指す — も十分存在意義を持ち得る、と。

もちろん、こうした考えが制作者の中で大勢を占めているとは思われないが、実際に教育者との間で教育番組の協同作業が行なわれる時、かなり多くの印刷メディア的教育番組が生まれている現実を認めないわけにはいかない。

VTRが急速に普及しつつある今日から将来にかけて、果してテレビは書籍のように、好きな時に、あるいは必要な時に、ある時は連続して、ある時は繰り返して、またある時は一時（あるいは何日も）中断して……というふうに見られるかどうか。

私が知りたかったのは、そういう見方の実態なり傾向なりが一般の人たちにあるのかどうか、教育番組の受講生の中にあるのかどうか、ということである。

この調査は、様々な制約もあって当方の望むデータをすべてとらえることは出来なかった。

従って今後更に緻密な調査が行なわなければならないのだが、それでも多くのヒントを示唆してくれた。

以下、第一章でアンケート調査の内容を、第二章でそこから得たデータを私の問題意識とつき合わせてみたい。

第 一 章

ア ン ケ ー ト 調 査

1. 調査対象者

調査は教育番組を継続視聴している人たち—— Aグループと、特に条件をつけない一般の人たち—— Bグループを対象とした。

2. アンケート依頼数と回答数

依頼数 …………… 600

回答数 …………… 358

(回収率 …………… 59.6 %)

3. 調査対象者の内訳

A・Bグループの内訳

(図－1)

A グ ル ー プ	調 査 対 象 者	依 頼 数	回 答 数
	NHK学園生徒（普通科コース）	200	50
	埼玉県民放送大学受講生	100	46
	合 計	300	96

B グ ル ー プ	調 査 対 象 者	依 頼 数	回 答 数
	東京・城東小学校PTA	70	68
	東京・永田町小学校PTA	70	59
	埼玉・大宮南中学校PTA	140	119
	そ の 他	20	16
	合 計	300	262

注1 NHK学園の普通科コースでは、高等学校卒業の資格を得ることが可能。
番組の視聴，レポートの提出，スクーリングの出席などで学習する。

注2 NHK学園生徒の属性は次の通り

年齢（平均） 33.1歳，男 35名，女 15名

職業 …………… 会社員 20，公務員 3，自営業 5，主婦 7，学生 6，
その他 9

注3 埼玉県民放送大学はテレビ埼玉を通して埼玉県が行っている教育講座，
期間は1年。面接授業もある。修了証書を授与するが資格には関係がない。

注4 埼玉県民放送大学受講生の属性は次の通り

年齢（平均） 55.0歳，男 22名，女 23名（不明 1）

職業 …………… 会社員 4，公務員 2，自営業 1，主婦 18，学生 1，
その他 17（不明 3）

注5 Bグループの属性は次の通り

年齢（平均） 38.2歳，男 119名，女 130名（不明 13）

職業 …………… 会社員 49，公務員 8，自営業 47，主婦 77，学生 41，
その他 26（不明 14）

注6 AグループとBグループの回収率が大幅に違うのは，Aグループは郵便
により，Bグループは手渡しによった為。

以上のように回答は

Aグループ …………… 96（約 27 %）

Bグループ …………… 262（約 73 %）

となった。

このA〃B = 27〃73という割合は，たまたま一般社会でのA〃Bの
割合よりも，かなりAが多い構成になっている。従って全体（A + B）
の数字を見る時，A的要素がやや高く反映しているものと考えられる。
しかし大体の傾向を見る場合，ほぼ社会一般の動きを反映していると考え
ても大きな間違いはないと思われる。

もちろん正確を期するために，以下のアンケートの回答には「全体」
「Aグループ」「Bグループ」それぞれの内訳けを示し，その違いを明
らかにした。

なお，%を示す数字は小数点1位までとし，以下は切り捨てた。従って
その総計は100にならない場合がある。

4. アンケート回答

〔1〕 あなたの家庭にはビデオテープ・レコーダー（以下VTR）がありますか。

VTR所有者数と割合 (図-2)

	あります (%)
全 体 (回答 358)	200 (55.9%)

グループ別内訳 (図-3)

	あります (%)
A グループ (96人中)	64 66.6 %
B グループ (262人中)	136 51.9 %

注7 この数字は総務庁が行った「昭和59年度全国消費者実態調査」の $\frac{316}{1000}$ (二人以上で構成する世帯 1000 あたり 316 台) , 全体の普及率 29.9 % を大幅に超えている。これは

- (1) A, Bグループの割合のうち, Aグループの比率が高いこと。
- (2) A, Bグループとも, 全国平均より都会に近い居住者が多く, 経済力も高い。

のが理由かと思われるが詳しくは不明である。

(図-3) で明らかなように, 一般グループよりも教育番組視聴グループの方が所持率は高い。目的がはっきりしているからで, そのことは同じAグループの中でも, 資格取得の目的がある方が高率を示している。

Aグループの内訳

(図-4)

Aグループの VTR所持数 (64)	NHK学園 (50人中)	38 76.0 %
	埼玉県民放送大学 (46人中)	26 56.5 %

〔2〕 1ヶ月に何番組くらい録画しますか。

注8 番組数とは、一つの番組が始ってから終了するまでを1と数える。従って同種の番組でも2回録画すれば2となる。

1ヶ月の録画本数(番組)

(図-5)

	全体(184) (%)	Aグループ(62)..... (%)	Bグループ(122)..... (%)
0 本	4 (2.1)	0 (0)	4 (3.2)
1 ~ 3	66 (35.8)	10 (16.1)	56 (45.9)
4 ~ 9	57 (30.9)	22 (35.4)	35 (28.6)
10 本以上	57 (30.9)	30 (48.3)	27 (22.1)

Aグループでは約半数の人が10本以上も録画するのに対し、Bグループでは3本以下が一番多い。所持率ばかりでなく、実行の面でもAグループは、Bグループをはるかに超えている。

ただ、全体やBグループの数字を読む場合、月に4～9本を録画する人をどう見るかによって解釈は相当違ってくる。この、月に数本と解釈できる数字を少ないと見れば、70～80%の人はあまり録画をしていないということになるし、普通の数字であると見れば、50～70%の人は適度に録画しているということになる。

機械が珍しいうちは面白がって無闇に録画するが、年月が経つとだんだん少くなるという声を聞く。「VTRを入手したころと現在と較

べて録画本数はどう変わったか」という質問に対して得られた数字は、全体（183人）で

○増えた—— 65……(35.5%) ○変わらない—— 82……(44.8%)
 ○少し減った—— 27……(14.7%) ○大幅に減った—— 9……(4.9%)
 であり、むしろ増加の傾向があることがはっきりわかる。

次に、録画したテープは実際にどれほど再生視聴されているかを調べてみた。

〔3〕 録画したテープは見ましたか。

録画テープの視聴

（図-6）

	全体(185) …… (%)	Aグループ(62) ……(%)	Bグループ(123)……(%)
ほとんど見た	153 ……(82.7)	54 ……(87.0)	99 ……(80.4)
半分くらい見た	29 ……(15.6)	8 ……(12.9)	21 ……(17.0)
あまり見ていない	3 ……(1.6)	0 ……(0)	3 ……(2.4)

80%以上の人が「ほとんど見た」と答えている。これも想像以上の数字である。とにかく録画はしたが、時間が経つうちに見るのが面倒になり消去してしまうという人が居ないわけではないが、少数である。録画をするということはそれ自体、かなり目的的事であることを示している。

但し、録画をしたら直ちに見るということではなく、録画と再生の時期は明らかに後にずれ込んでいる。そのことを示すのが次のデータである。

「1ヶ月に何番組くらい再生しますか」という質問に答えたもので、念のため「1ヶ月に何番組くらい録画しますか」という前述の数字と並べてみた。

1ヶ月の録画数と再生数

(図-7)

	1ヶ月の録画数(184) (%)	1ヶ月の再生数(183) (%)
0 本	4 (2.1)	10 (5.4)
1 ~ 3	66 (35.8)	87 (47.5)
4 ~ 9	57 (30.9)	51 (27.8)
10 本以上	57 (30.9)	35 (19.1)

1ヶ月に10本以上録画をした人が約31%いたのが、再生は20%を割っている。たくさん録画をしても、再生して見るのは3本くらいというのが平均像である。図は全体のデータだが、A・Bグループでもまったく同じ傾向を示している。(内訳は省略)

といって、録画したテープは見られていないかという、(図-6)で示したように、「ほとんど見た」と答えている。要するに再生数は録画数に追いつかず、溜っていく傾向にあることを示している。

次に、これらの人たちがどのような番組を、どのような方法で見ているかについて述べる。

[4] どんな番組を録画していますか。多い方から順位をつけて下さい。

録画順位の高い番組

(図-8)

	1位(184) (%)	1位+2位(354) (%)
1. 映画, ドラマ	87 (47.2)	130 (36.7)
2. 音 楽	17 (9.2)	51 (14.4)
3. スポーツ, 趣味	25 (13.5)	73 (20.6)
4. 教育, 教養	48 (26.0)	85 (24.0)
5. そ の 他	7 (3.8)	15 (4.2)

注9 本来なら番組の分類は、もっと細分化する必要があるのだが、調査の分析の手間・費用等の関係で、大まかな分類となった。

注10 図表の数字は、例えば「映画・ドラマ」を一番多く録画する（1位）と答えた人が、87人……（47.2%）であることを示す。右列の「1位+2位」は、「映画・ドラマ」を1位とした人と2位とした人を加えた数を示す。こうすると平均化した数値となるが、傾向はほとんど変わらない。

「映画・ドラマ」を1位とした人がもっとも多く、「教育・教養」が第2位を占める。

多く録画される番組は、

1. 興味や関心の高いもの。
2. 時間が経っても価値の変らないもの。

蒐集的価値のあるもの。

3. 必要性の高いもの。

の三つの動機を持っている。

このうち(1)の要素を持つ番組は、放送時に生で見られることが多く（それ故に視聴率も一番高い）、録画されるのは、放送時間の都合で見られないという場合が多い。従って、録画を促す動機としては、案外低いのではないかと思われる。

実際に録画の実行を促すのは(2)と(3)の動機ではないだろうか。次に示すグループ別の図表を見ると、Aグループでは「教育・教養」が断然ほかを引き離しているし、Bグループではこれまた「映画・ドラマ」が群を抜いている。また「スポーツ・趣味」や「音楽」など通常比較的高い視聴率をとる番組は、低い数字を示している。

高録画順位 A・Bグループの内訳

(図-9)

	A グループ (62) 1 位 (%)	B グループ (122) 1 位 (%)
1. 映画, ドラマ	10 (16.1)	77 (63.1)
2. 音 楽	6 (9.6)	11 (9.0)
3. スポーツ・趣味	4 (6.4)	21 (17.2)
4. 教育・教養	40 (64.5)	8 (6.5)
5. そ の 他	2 (3.2)	5 (4.0)

さて、こうした録画はどのような方法で行なわれているのだろうか。

〔5〕 どういう方法で録画していますか。

録画の方法

(図-10)

	全体 (185) (%)	Aグループ (62) (%)	Bグループ (123) (%)
視聴しながら	47 (25.4)	20 (32.2)	27 (21.9)
人に頼んだり予 約録画による	138 (74.6)	42 (67.7)	96 (78.0)

放送時にテレビセットの前になくても録画できる（あるいは他の番組を見ているでも録画できる）というこの機械の特性を十分に利用しているのは当然のことである。

ただ、ここで注目しておきたいのは、Aグループの中で約 $\frac{1}{3}$ の人たちが、視聴しながら録画しているということ、そしてその割合はBグループより高いというデータである。

このことは第二章において触れるので、ここでは指摘するだけにとどめる。

次は視聴の方法である。録画テープを見る時、二つの方法がある。一つは、生放送を見る時とまったく同じように初めから終わりまで通してリアルタイムで見る方法（以下この方法を「スルー」— through — という）と、必要なところで画面を止めたり、同じところを二度、三度と繰り返したりして見る方法（以下この方法を「S・R」— stop and repeat — と略称する）である。

CM部分のみを早送りして見る場合は、内容はリアルタイムであるから、これは「スルー」とする。実際はどのように見られているか。

〔6〕 どのような方法で再生視聴していますか。

再生視聴の方法

（図—11）

	全体 (229) (%)	Aグループ (70).....(%)	Bグループ (159).....(%)
ス ル ー	112 (48.9)	22 (31.4)	90 (56.6)
S ・ R	31 (13.5)	14 (20.0)	17 (10.6)
番組によっ て両方	86 (37.5)	34 (48.5)	52 (32.7)

Bグループでは「スルー」と答えた人が半数を超えており、ほぼこの方法による見方が一般的であると言ってもいいと思う。一方、Aグループでも「S・R」より「スルー」の方が多いが、「番組によって両方の方法」と答えた人が約半数もあり、この「両方」が鍵である。従って、この「両方」を分析してみる必要がある。

「両方」と答えた人のみの質問

〔7〕 止めたり、繰り返したりして視聴しているのは、どんな番組ですか。

注11 「S・R」する番組が複数種類ある時は、複数で回答してもらったので、回答数(148)は回答者数(86人)を超えている。

「S・R」する番組

(図-12)

	全体 (148) …… (%)	Aグループ (57) …… (%)	Bグループ (91) …… (%)
1. 映画 ドラマ	2 …… (1.3)	0 …… (0)	2 …… (2.1)
2. 音楽	21 …… (14.1)	4 …… (7.0)	17 …… (17.8)
3. スポーツ 趣味	47 …… (31.7)	18 …… (31.5)	29 …… (31.2)
4. 教育 教養	59 …… (39.8)	29 …… (50.8)	30 …… (32.9)
5. その他	19 …… (12.8)	6 …… (10.5)	13 …… (14.2)

「教育・教養」番組が、もっとも多く「S・R」されているのは、理解ということが第一義であることを考えれば納得がいく。特にAグループでは高率である。

因みにAグループで「両方」と答えた34人のうち「教育・教養」を「スルー」で見ると答えた人は、僅か2人だけであった。

こうした傾向は、Bグループでも同じである。「理解するもの」に関してはA、Bの区別はない。

次に「スポーツ・趣味」が「S・R」において高率であることについて簡単に触れておく。

これらの番組には次のような見方がある。

〔スポーツ〕

1. 最頂の選手の活躍を何度でも見る。
2. ストップモーションやスローモーションでフォームを学ぶ。

〔趣味〕

1. 好きな歌手や演奏家のプレイを何度でも見る。
2. 囲碁、将棋などで、次の手を考えたり、繰り返し見て戦法を学ぶ。
3. 園芸や手芸や料理など、ノウハウを必要に応じてチェックする。

こういった要素が、「S・R」に結びついているのではないかと考

えられる。

以上，質問〔6〕，質問〔7〕で扱ったことをまとめてみると，およそ次のことがいえると思う。

1. 普通一般の人たちはテープの再生視聴を，生放送と同じように見ている。
2. 特殊な関心や目的をもっている番組については，止めたり繰り返したりして見ている。
3. 「教育・教養」番組では，止めたり繰り返したりして見る方が多い。

V T Rを使用しながら教育講座を受講している人たち（6ヶ月以上継続受講した人）は，どのように感じているだろうか。

〔8〕放送による「教育・教養」番組を受講した時，V T Rは役に立ちましたか。

教育・教養番組とV T R

（図-13）

	全体（77）……（%）	Aグループ（63）……（%）	Bグループ（14）……（%）
大変役に立った	55 ……（71.4）	50 ……（79.3）	5 ……（35.7）
まあまあ "	15 ……（19.4）	8 ……（12.6）	7 ……（50.0）
あまり役に立たなかった	7 ……（9.0）	5 ……（7.9）	2 ……（14.2）

Bグループを除いて，V T Rは大変役に立ったという答が出ている。

このうち「まあまあ役に立った」という答をポジティブに解釈すると，両方で90%を超える。ネガティブに考えても70～80%が積極支持派である。V T Rはこの分野では大変な威力を発揮していることがわかる。

最後に、VTRの持つ様々なメリットのうち、次の三つに順位をつけて貰った。

〔9〕 VTRのメリットのうち、あなたにとって重要なものから順位をつけて下さい。

VTRのメリット

(図-14)

	全体(249).....(%)	Aグループ(89)....(%)	Bグループ(160)....(%)
① 放送時間に拘束されない	141 (56.6)	48 (53.9)	93 (58.1)
② 映像資料が自のものになる	70 (28.1)	20 (22.4)	50 (31.2)
③ 止めたり, 繰り返ししたりができる	38 (15.2)	21 (23.5)	17 (10.6)

注12 この数字は1位3点, 2位2点, 3位を1点として合計したもの。

この中で興味をひくのは、Bグループの(3)の数字で、ここでもBグループは「止めたり, 繰り返ししたり」の機能に冷淡であることを明らかにしている。それに比べてAグループでは、ほぼ2倍の数字になっている。

とはいっても、「S・R」の機能は(1)の「放送時間に拘束されない」と比べるとはるかに及ばない。個々には様々な違いはあっても、トータルに見た時、VTRが現在果たしている役割のどこにアクセントがあるかを明示した数字であると思う。

第二章

テレビメディアとVTR

—教育番組は例外か—

はじめのところで、テレビはそれ自体のメディア性に支配されていると書いた。これはトロント大学の教授で、「文化とテクノロジー研究所」の所長であったマクルーハン（M. McLuhan）の“Media is the message”という言葉を通俗的に言ったものである。

メディアは、伝えるべき内容とイコールだという、そのメディアとはテレビの場合どんなものか、そしてそのメディア的環境は伝えるべき内容とどうかかわっているのか、そこからこの章を始めたい。

テレビメディアとは

一般の人たちがテレビ番組を見るためには、次のような system と performance と mechanism を要する。

1. 放送局からプログラムをパフォーマンスする。（生放送・フィルム・VTRなど）
2. 映像と音声を電気信号に変え、電波として空中に送る。
3. 離れた場所でその電波を受信する。
4. 再び電気信号を、元の映像と音声に再生する。

注13 ケーブル・テレビジョン（CATV）を除く。これについては後述する。

注14 なお、ここではメディア特性についての説明であるので、VTRを所有している場合を除く。以下も同じ。

アンテナを含めたテレビセットを持っていれば、放送電波の届く範囲内の人はだれでも視聴できる。

その意味するところは次の通りである。

1. テレビを視聴するのは、テレビセットを持つ（あるいはその前にいる）不特定多数である。
2. 放送が継続している間は、その同じ時間に、同じ内容のものが視聴できる。
3. 視聴の選択（見るか見ないかの選択、AではなくBを見る選択）は受け手の自由である。
4. 放送法によるNHKの場合を除き、原則として無料である。

受信しているのは上記のように不特定多数である。ということは視聴する側の環境条件も極めて多様であることを意味している。例えば放送が行なわれている時、

- イ 眠っている人
- ロ 食事をしている人
- ハ トイレに行っている人
- ニ 働いている人
- ホ 遊んでいる人
- ヘ 移動中の人
- ト 来客中の人 ETC。

……… とまあ際限なく多様である。

また、放送を受信する環境も同様に多様である。例えば

- チ 映像・音声とも良好なセットを持っている人
- チ' その反対の人
- リ 電波状況が良好な場所にセットのある人
- リ' その反対の人
- ヌ 光や音の環境が良好な場所にセットのある人
- ヌ' その反対の人
- ル 大きなブラウン管（スクリーン）のセットをもっている人
- ル' その反対の人 ETC。

そして、もう一つ。不特定多数の好みがこれまた多様であること。

以上、テレビにおけるすべての要素をまとめてみると次のようになる。

1. 放送局によるプログラムの送信
2. 不特定多数の視聴者の受信
3. 放送時間と受信視聴時間の絶対性
4. 放送内容の絶対性
5. 視聴者の多様な行動環境
6. 視聴者の多様な受信環境
7. 視聴者の多様な好み
8. 視聴者による選択の自由

ここに挙げたすべてのものが、既にテレビにおけるメディア環境というものである。そして放送する側も、それを視聴する側もこのメディア環境に involve されていて、その外に立っていることは出来ない。テレビとは、こうしたメディア環境の総称である。

以上が「テレビはそれ自体のメディア性に支配されている」ということの意味あいである。

V T R の出現

さて、1975年に家庭用のV T Rが世に出てから十年余、今や1,000世帯（二人以上で構成する）当り316台のV T Rがあり、普及率でも29.9%に至っている。これはここ5年間で5.1倍になったことを示す。

こうした急激な普及を示すV T Rはテレビというメディアにどのような影響を与えているのだろうか。次にこの問題を考えてみたい。

先にテレビにおけるメディア環境として、(1)～(8)までの要素を挙げておいた。これを、V T Rという機械があればどのように状況が変わるかを検討してみた。

1. 放送局によるプログラムの送信 …… 変化なし
2. 不特定多数の視聴者の受信 …… 変化なし
3. 放送時間と受信（視聴）時間の絶対性 …… 変化あり（後述）

4. 放送内容の絶対性 …… 変化なし
5. 視聴者の多様な行動環境 …… 変化あり（後述）
6. 視聴者の多様な受信環境 …… 変化なし
7. 視聴者の多様な好み …… 変化なし
8. 視聴者の選択の自由 …… 部分的に変化あり（後述）

まず送信と受信のシステムには関係がない。（放送によらないビデオテープ——多種類の市販のテープや個人で撮影したテープ等——もあるが、これらは放送と本質的に関係がないので除く。）また放送内容も、編集による加工が可能で、理論的には変化させることは可能であるが、現実としては無視してよく、「変わりなし」とするのが妥当である。また、受信セットや電波状況の良否やスクリーンの大小も無関係である。視聴者の好みの多様性にも、ほぼ変化なしと言っていい。

状況が変わったのは(3)(5)(8)である。この各項目には、よく見ると共通性がある。それは「時間」である。

例えば(5)の「行動環境」については、視聴者が放送時にどんな行動をしていても、どんな場所にいても、VTRに録画してあれば、いつでも見ることが出来る。また(8)の「選択の自由」では、見るか見ないかという選択については変化はないが、AではなくてBを見るという選択では状況に変化が生じる。同時に放送されるAもBも見たいという人にとって、生放送では二者択一の方法しかなかったが、VTRの裏番組録画により「AもBも」が可能になった。これは同時に放送されたプログラムを、時間的にseparateしたことを意味している。(3)の「放送時間と受信（視聴）時間の絶対性」については最初のところで述べたように、従来テレビ本質論の母胎となっていたところであるが、ここには極めて大きな変化が生じた。

かつては放送時刻と視聴時刻は同じでしかあり得なかった。しかしVTRは放送時刻から視聴時刻を解放した。またかつては放送時間（例えば30分番組）はそのまま視聴時間（同じく30分）であった。しかし、前述したようなVTRの機能により、時間を解体することが可能になった。またか

つて視聴が可能なのは放送が継続している間だけであった。放送が終った時が、その内容も消え去る時であった。——今は放送が終っても内容はそのまま残っている。

以上で明らかのように、VTRはテレビにおける「時間的情況」を変えたのである。

この現象は音楽会とレコード（あるいはテープ）の關係に似ている。オーケストラを聴くために人々は演奏会場へ行った。しかし、プレーヤーとレコードがあれば、オーケストラの演奏をいつでも、何度でも、好きな（必要な）部分を繰り返し、きらいな（必要のない）部分をとばして聴くことができる……。

とはいうものの、可能性だけでその本質を論ずることも出来ない。

例えば、レコードは音楽という時間芸術の「時間」を解体させることが可能である。しかし、人々が現実にそのような方法でレコードを聴いているかどうかは別問題である。

想像するところ、専門家を目ざす人たちとか特別なマニア以外に、そのような聴き方をする人が多数いるとは思われない。レコードはやはり時間の流れの中で“素直に”聴かれているのが現実である。

テレビの場合は果たしてどうか。

VTRはどのように使われているか。

その答はすでに第一章のアンケートで示した通りである。（図-11参照，61ページ）

およそ半分の人たちが、生放送と同じ見方「スルー」で見ている。

この数字は実際にはもっと高い。何故なら「番組によって両方」と答えた人でも「映画・ドラマ」を録画する人が一番多く（図-8参照，58ページ），しかも「映画・ドラマ」はほぼ全部の人が「スルー」で見ているからである。（図-12参照，62ページ）

つまり、生放送を見るように、時間的变化を加えずに「スルー」で見ている人が最も多く、これが普通の見方であるということである。

何故か。それは番組というものが時間の流れにのって作られているからである。音楽が時間芸術——時間的構造をもつものであるように、テレビというメディアも時間的構造をもつ。そして、それにインボルブされた内容も同時に時間的構造をもつものとなる。

一点から次の一点へ、そしてまた次の一点へ。この持続の連続がテレビ映像の生命である。フィルムで制作したドキュメント番組よりもビデオテープで制作したドキュメント番組の方が1カットが長いのは、必ずしも経済性の問題だけではない。現在状況の持続ということに関して、テレビメディアの方が映画メディアよりも、より強い性質をもっているからである。

しかし、その一方で時間的構造を破壊しても存在できるものがある。

(図-12)にあるように「スポーツ・趣味」と「教育・教養」の番組である。

「スポーツ・趣味」についてはアンケートのところでも述べたが、これらの番組には、旅行の後で写真を見て楽しむような、いわば旅行という次元を記念写真という次元に変えて楽しむという要素と、技術のノウハウを学ぶという要素が多い。これが「S・R」される所以かと思う。従って、この種の番組はまず「スルー」で見る。次におもむろに記念写真を楽しんだり、ノウハウを学んだりするために「S・R」すると私は考えている。そういう意味ではこの種のものは、「スルー」組に属すると言っても間違いではないのかもしれない。

一方「教育・教養」の方はやや事情が異なる。例外はあるけれども、この種のプログラムは「理解されること」を目的としている。

注15 教養番組には特別に「理解」を要するものから、そうでないものまで幅が広い。ここでは「理解」という点に絞って論を進めたいので、誤解を避けるためにアンケートの表記を離れて、以下「教育番組」とする。「理解」を必要とする種類の教育番組に解されたい。

教育番組の場合、テープ視聴の途中でわからない個所が出てきた時、とにかく全部を見終ってから、わからない部分に戻るという見方もあるだろうが、理数系のプログラムのように、ある点で理解できないと先へ進むのが難しいというものも多い。そういう類のものは視聴の途中でもテープを止める。その部分を繰り返し見る。テキストや参考書で確認してみる。そして理解できたら前へ進む……そういう見方をしても「理解」の必要性が高い番組であればあるほど、その内容は損なわれない。何故ならば、この種の番組だけが時間的構造が希薄であるから。

私は前に、テレビというメディアにインボルブされた内容は必然的に時間的構造をもつと言った。とすれば、これは矛盾ではないか。——確かに矛盾である。それならば次のように言い直してみよう。

教育番組でもテレビメディアにのった以上、時間的構造をもつ。時間的構造とは一点から次の一点へと持続すること、いいかえれば最初の一点が次の一点を要求する、そしてその一点がまた次の一点を要求する、ということである。

この要求する力とは何か。芸術においては必然性であり、テレビにおいては、一つの持続が次の時点においてはどうなるかという、発見への好奇心である。

ところが教育番組の場合は、理解されるということがほぼ絶対の条件である。そこでは「理解」が「発見への好奇心」に優先して内容全体を支配する。あるいは「理解」という鍵がないと「発見への好奇心」は触発されない、と言った方が正確だろうか。

教育番組の時間的構造は、このような二重構造になっている。視聴を途中で中断しても内容が必ずしも損なわれない理由もそこにある。

こうして見ると、教育番組は他の種類の番組とは異質であり、時間的構造を持つものの中での鬼っ子であるといえる。やさしく言えば、テレビというメディアに極めて乗りにくいということである。

このような状況の中で、VTRは大変有効な力を発揮する。時間的構造

物を、ある程度空間的構造物の如く扱うことを可能にさせる。教育番組の受講生の多くがVTRは大変役に立ったと答えているのは当然である。

(図-13参照)

また、図-12でおわかりのように、Aグループでは「教育・教養」の録画が群を抜いて高率であるのも、うなずけるところである。

放送教育開発センターの柴山盛生助教授の調査によると、放送大学の教科番組のうち、受講生の多い科目については約半数の人たちが番組を録画しているという結果が出ている。これも高い録画率である。(「放送授業の視聴状況について」1986年)

「スルー」でも見られている教育番組

教育番組においてはVTRの利用率は高く、かつその効果も大きい。しかし、だからといって、教育番組の視聴者のすべてが、止めたり繰り返したりする「S・R」方式で見ているわけではない。(図-3, 55ページ)で見るように、AグループのうちVTRを持っている人は66.6%である。あとの33.4%の人は「生」で見るほかはない。また(図-10, 60ページ)で示したように、Aグループでは、「スルー」で見ながら録画している人が約1/3もいたことを思い出して頂きたい。

柴山助教授は先の調査の中で、放送大学受講生の視聴の形態も調査された。それによると、

1. 視聴（放送を見る）
2. 視聴収録（放送を見ながら録画をする）
3. 収録（放送は見ず、録画だけをする）

の三つの形態は次のようであるという。

放送大学受講生の視聴形態

(参考図-1)

科 目	視 聴 (%)	視聴収録 (%)	収 録 (%)
外 国 語 (テレビ3科目)	36.3	43.2	20.5
専 門 科 目 (テレビ34科目)	51.9	30.8	17.3

注16 この数字は第1回目の放送時の時のものであり、再放送、再々放送時になると、また変わってくる。

この図でおわかりのように、われわれが考えている以上に「スルー」で見ている人が多いことに注目する必要がある。

放送大学の学生の場合、受講科目数が多く、録画したテープだけに頼っていると、テープがどんどん溜っていったら収拾がつかなくなる、できるだけ「生」で見ないと、かえって学習のチャンスを逃がすことになるという特別な事情もあって、私の調査以上に「スルー」が多い結果になっているように思われる。それにしても、かなりの人が教育番組を「時間的構造」のままに見ている現実、教育番組の企画者や制作者にとって多くのことを考えさせずにはいられない。

即ちVTRが教育番組の時間性をかなりの程度コントロールできるからといって、VTRの能力を前提にして番組を製作するのは問題がある、ということである。そして「発見への好奇心」は教育番組においてもなお必要不可欠な要素であり、その要素で追っていけば何らかの「理解」につながるといふ番組が、依然として求められていることを、われわれに示唆してくれるのである。

放送教育における役割分担

学問の中には、高度な専門性をもつもの、極めて抽象度の高いものなど、

いわば一見しただけでは理解の得難いものがいくつもある。それらを無理に易しくしようとすると、その本質を壊したり損ったりすることが多い。といって無理矢理電波に乗せてみても、結局はVTRの中でしか生きられない。

VTRは効果的な機器ではあるが、教育番組においてもなお「スルー」で見ている人が多勢いることを忘れてはならないと思う。またVTRではなくて、普通のテレビ状況の中で教育番組を見ている人たちを無視して、放送教育というものは成立しないと思われる。

以上のことを考えれば、放送による教育番組を企画する時、メディアにのりやすいもの（時間的構造の中で生き易いもの）、のりにくいもの（前述の二重構造のもの）を見分けるという大変平凡なことが、VTRの有無に関係なく大切なのではないだろうか。

といって、テレビメディアにのりにくいものは放送教育の場から締め出すべきだと言うのではない。それらの学問のすべてをテレビで表現する必要はないことを言いたいのである。

そのためにこそ印刷教材や面接授業の意義がある。特に印刷メディアは抽象性や専門性の高いもの、じっくり検討したい内容のものを盛り込むのに最適なメディアである。あるいはまた個人の質問に person to person で答えてくれる面接授業は、難しい内容を理解に導く貴重な方法である。

こうしたメディアや方法がありながら、何故にすべてをテレビに盛り込まなければならないのか。

それぞれのメディアや方法が、もっとも得意とする分野で役割分担をする、そしてそれらを有機的に組み合わせる——平凡だがこれが結論ではないだろうか。ここには何の無理もないのである。

1986年2月、放送教育開発センターで行なわれた「放送利用の大字公開講座シンポジウム」で、BBC作品「飛ぶ鳥のメカニズム」が討論資料として利用された。

この時、大変興味深かったのは航空力学の専門家である東 昭東大教授

のお話であった。教授は同作品を専ら専門的視点で見ておられ、エピソードの部分、感動的な部分についてはほとんど触れられなかった。一般の人たちとは違い専門家としては当然の見方かもしれない。

航空力学における飛翔のメカニズムそのものを教えたいということになれば、エピソードも感動シーンも確かに不必要で、その方が学問的密度も高まるであろうし、その上学習するのに能率的である。このような、学習にはコミュニケーションしたい必要にして十分な要素だけがあればよいという論理を推し進めていくと——そのことの当否は別にして——最終的にはコンピューター通信に行きつくのではないかと思われる。それはテレビの教育番組に対するアンチ・テーゼとしては有効かもしれない。メディアは異なるが、テレビと役割分担する可能性もある。

これについて語る力には私にはないのでこれ以上触れないが、少なくとも現在以上にコンピューター通信が遠隔教育の場に進出することは間違いないことのように思われる。

特定少数

放送による教育論の中に必ず出てくるものに「教育番組を見ている人達は特別な人たちである」という議論がある。

彼等ははっきりとした目的を持っている。それ故に、たとえ学習する内容に興味をもっていなくても理解しようという態度で視聴する。つまり彼等は特別な視聴者であり、他の一般の人たちと同列に考えるべきではない、という論理である。

それは、テレビにおける講義の内容が難しい、あまりにも抽象的な言葉に頼り過ぎる等々の批判に対する答として用意されている。

特殊な人が視聴している故、番組も特殊であってよいとするこの種の考えは、しかし多くの矛盾を孕んでいる。

確かに教育番組の受講生は一般の視聴者と比べて特殊である。特殊であるが故に彼等は特定少数である。これまで述べてきたように、テレビは不

特定多数に電波を送っているメディアである。同時に、伝えるべき内容も不特定多数に送られるものを選択されている。

これを特定少数に送ることはもちろんできる。しかし、そこには次のような疑問が出てくる。

一つは電波の効率の悪さである。95%以上の電波（既ち内容）が利用されることなく消えていく。

たとえ効率は悪くとも、国家的な意義があるものならば、公的機関としては金銭を惜しむべきではないというのは正論であり、それなりの支持は得られると思う。ただその時、電波の使われ方の効率が悪くても、経済的な負担が大きくても、そのメディアの本質が生かされるかたちで使用されるのであれば、という条件がつく。

というのは、いまだかつてメディアの本質を無視したコミュニケーションで長い生命を保った例は無いからである。

学問は難しいものだ→難しいものは難しいまま放送するほかはない→学ぶ人は学問をしようとしている特別な人である→だから彼等との間のコミュニケーションは成立する——という論理であれば、テレビというメディアはそこにどれほどの力を注ぎ込もうとも、日に日に衰弱するほかはないと思う。マイナーはマイナーであっても、その本質を生かす方向でのマイナーでなければならぬ、というのが私の考えである。

注16 例えば、普通ならば非公開のものや場所や行事や行動を電波を使って公開するということ。非公開であることが国民の利益になるものは別として、そうでないのに国民の目に入りぬくいものも多い。

そういうものを放送で結ぶことは、国民にとって意義のあることであるし、非公開のもの自体を活性化させる作用もする。このような電波の利用法は、たとえ視聴率が低くても、国民に現在の、あるいは現実の情報を送るというテレビメディアを生かした方向のもの、といえるだろう。

少し皮肉な見方かもしれないが、現在の教育放送の中で電波を使用して

いる意味は、実際のところ少し違ったところにあるようにも思える。(図-10)で見るように、録画は家族に頼んだり、予約録画によるものが多い。Aグループでも67.7%の人がそうである。ここにおける電波は映像教材を配達する宅配便の役目をしている。

もし映像教材を通信販売や市販等の方法で捌こうとしたら、その時間と手間は膨大なものになろう。しかし放送による録画なら極めて簡単。これも電波の利用法ではあろうが、もしそれが放送の主な役割となつては、まさに瀕死の状況というべきであろう。

ブラウン管による映像・音声情報を特定少数に送るメディアがある。CATV (cable television) がそれである。放送局と視聴者の間をケーブルで結び、特定の加入者に情報を送る。基本料のほか、情報そのものが有料なもの (pay channel) もある。こうしたCATVの場合では、特定少数者に情報を買ってもらうために、情報も特定なものとなる。映画専門、スポーツ専門、ニュース専門、株式専門、天気予報専門のチャンネルという具合である。

本来、教育番組もこのメディアによるのが本筋であろう。もしこのメディアで伝達される教育番組であるなら、今まで述べてきた矛盾は一挙に解決するのではないか。内容がどんなものであろうとも、それを望む人たちは契約するであろうから。

テレビにおけるVTRの出現は、われわれの間に多くの映像情報を定着させることに成功した。そして放送時間からわれわれを解放してくれた。

しかし、テレビメディアが持つ多くの特性、例えば現在進行形の絶対時間がもつ力は、それによって少しも損なわれてはいない。

昨年(1985年)の日航機事故の際、どれほど多くの人たちがテレビの前に釘づけになったかを想起すれば十分である。

VTRの功績とテレビメディアの特性は互いに相喰むものではないというのが私の結論である。

注18 アンケート調査では、東京・城東小学校，同永田町小学校，埼玉大宮南中学校，NHK放送学園，東京都教育委員会，埼玉県教育委員会のご協力を得た。

またアンケートの制作，コンピューターによる分析等には，放送教育開発センター制作部事務官の協力を得た。